

- Cornell University Press, 1970), p.113.
- 2) ブランチ・ゲルファント (岩本巖訳), 『アメリカの都市小説』(研究社, 1977), p.50.
 - 3) Lionel Trilling, *The Liberal Imagination* (New York : The Viking Press, 1950), p.141.
 - 4) F .O. Matthiessen, *Theodore Dreiser* (Westport : Greenwood Press, 1951), p.87.
 - 5) 村山淳彦, 『セオドア・ドライサー論——アメリカと悲劇』(南雲堂, 1987), pp.59-70.
 - 6) Donald Pizer (ed.), *Sister Carrie : The Authoritative Text, Backgrounds and Sources, Criticism* (New York : W. W. Norton & Company, 1970), p.1. 以後, *Sister Carrie* からの引用はすべてこの版により, カッコ内にページ数のみ記す。
 - 7) Ellen Moers, “The Fineness of Dreiser,” *American Scholar*, XXX (Winter, 1963-64), p.109.
 - 8) Charles C. Walcutt, “The Wonder and Terror of Life,” in *Sister Carrie : The Authoritative Text, Backgrounds and Sources, Criticism*, ed. Donald Pizer (New York : W. W. Norton & Company, 1970), p.504.
 - 9) 拙稿, 「John Dos Passos : *Manhattan Transfer* 論——都市からの敗走——」, 『文芸と思想』(1990), 第54号, p.88参照。
 - 10) Kenneth S. Lynn, “*Sister Carrie* : An Introduction,” in Pizer’s *Sister Carrie*, *op. cit.*, p.546.
 - 11) Richard Lehan, *Theodore Dreiser : His World and His Novels* (Carbondale & Edwardsville : Southern Illinois University Press), p.60.
 - 12) Sheldon N. Grebstein, “Dreiser’s Victorian Vamp,” in Pizer’s *Sister Carrie*, *op. cit.*, p.551.
 - 13) 村山淳彦, 前掲書, p.55.
 - 14) F. O. Matthiessen, *op. cit.*, p.492.
 - 15) 丸山圭三郎, 『文化のフェティシズム』(勁草書房, 1984), p.32.
 - 16) 村山淳彦, 前掲書, p.38.
 - 17) ブランチ・ゲルファント, 前掲書, p.110.

lie behind. When the distraction of the tongue is removed, the heart listens.

In this conversation she [Carrie] heard, instead of his [Hurstwood's] words, the voices of the things which he represented. (88)
[Italics mine]

人間は「言葉」にあまりにも意味を込めようとするが、実際には、話し言葉はそれほど大きな意味は伝えない。CarrieはHurstwoodとの会話で、「彼の言葉ではなくて、彼が表す事物の声を聞いていた。」現代的な都市社会においては、人間よりも事物の方が人間的な機能を果たし、人間の感情も物質化される傾向を示し、逆に、人間の方は、「搾取工場」で働くCarrieのように、機械の一部と化してしまうという皮肉な状況が生じる。この小説の商品や物質は人間のように生命を持ってしまっている。Carrieが最も価値をおく「お金」さえもが生命を帯びたように柔らかく、さらさらと音をたてる。こうして、この世界に住む人間には、物質的なもの（衣服や宝石や部屋の装飾品など）が「美」と同一視されてしまうのである。

このような「事物のフェティシズム」は、大量生産された画一的な商品に溢れた都市的な生活から生まれてくるひとつの現象であるが、ほかにも都市的な特長はこの作品に多く認められる。家庭の核家族化や、疎外感や匿名性などである。Carrieの姉夫婦やHurstwoodの家庭などは核家族であり、家族の間に意思の疎通は少なく、孤立したままである。CarrieやHurstwoodは、大都市のなかで孤独や疎外感 (alienation) を強く抱いている。彼らは都市の群衆のなかに埋もれてしまい、匿名性 (anonymity) を強く意識せざるをえない。このような作品の都市描写や都市生活の要素は、都市化が始まったばかりの時代に、作者のDreiserが如何に鋭くその特長を捉えていたかを示している。批評家ゲルファントは、Dreiserは「アメリカの都市生活からたしかに題材を得ていたが、それ以上に、二十世紀の世界における荒地の要素を描き、それを嘆いた他の有名な作家と共通のものが多分にある」¹⁾と評している。現代社会の「荒地」的状況をDreiserはいち早く捉えていたのである。まさに、これがDreiserが現代性をもった作家と見られる所以であろう。

注

- 1) Robert H. Elias, *Theodore Dreiser : Apostle of Nature* (Ithaca & London :

物によって決定されるというきわめて現代的な状況が現出する。Carrie が都市に出てきて初めて出会う Drouet は「洋服全体がピッタリと身体についていて、そのうえ厚底のタン革の磨き上げられた靴と、灰色のフェドラー帽子というりゅうとした出で立ち」(3)であり、一目見ただけで彼女の心を捉えてしまう。衣裳がそれを身につけた人の「身分と知性」を表すのである。この「衣服」のもつ意味については、早くは F. O. Matthiessen が「ドライサーにおける衣服は人物を実際以上に高めて表す主要な手段である」¹⁴⁾と書いて注目していたのであるが、これは、更に、丸山圭三郎が『文化のフェティシズム』の中でいうところの現代に特徴的な「商品のフェティシズム」¹⁵⁾という観点から眺めてみると興味深い。現代の商品過剰の時代においては、人間の意識は、溢れるほどの事物に専ら向かい、人間そのものではなくて、人間に付属する商品や身につけた衣裳の方がよりリアルに意味を発揮することになるのである。こうして、「人間」よりも「物」のほうがより崇拝されるという「事物のフェティシズム」が生まれる。Dreiser の衣服やその他の事物の扱い方にもこれが当てはまるといえる。

Fine clothes to her [Carrie] were a vast persuasion ; They spoke tenderly and Jesuitically for themselves. When she came within ear-shot of their pleading, desire in her bent a willing ear. The voice of the so-called inanimate ! Who shall translate for us the language of the stones ? (75).[Italics mine]

衣裳という「無生物」の声が彼女には圧倒的な「説得力」をもっていて、彼女にやさしく語りかけてくる。Dreiser は、何時か「衣裳の哲学 (philosophy of clothes)」(4)を書く女性が現われるだろうと付け加えていたのだが、もちろん、作者自身にこの哲学はよく理解できていたのであろう。つまり、ここでは、村山淳彦の言葉を借りれば、事物のもつ「記号論的言語能力」¹⁶⁾が強調されているのである。更に、Hurstwood との出会いにおいてもこの「事物の言語」は再び強調されることになる。

People in general attach too much importance to words. They are under the illusion that talking effects great results. As a matter of fact, words are, as a rule, the shallowest portion of all the argument. They but dimly represent the great surging feelings and desires which

fortune yet to make and those whose fortunes and affairs had reached a disastrous climax elsewhere. (11) [Italics mine]

1889年のシカゴは、Carrieのような「若い娘の無鉄砲な職さがしが別段おかしくもないほどの特別の発展性」を持っていたし、「磁石のような吸引力となって、全国から希望に溢れたものも絶望したものも引きつけた。」この都市は開発途上にあり、「新築の建物のハンマーの音がいたところで聞こえていた」(11)のである。故郷とはまったく異なる速さで「自然」に「人工」の手が加えられていくのである。

Polished brass or nickel signs at the square stone entrances announced the firm and the nature of the business in rather neat and reserved terms. The entire metropolitan centre possessed a high and mighty air calculated to overawe and abash the common applicant, and to make the gulf between poverty and success seem both wide and deep. (12) [Italics mine]

「四角の石造りの建物の入り口の磨き上げられた真鍮やニッケルの看板」はその会社の仕事の性質を書き記し、「普通の求職者を威圧し、赤面させ、貧困と成功の間隙を広く深くさせるような高踏的な力強い外見」を持っている。都市の表面的な輝きは、貧富の差を強く感じさせ、成功の機会を与えると同時に極貧の淵をも垣間見せる。Carrieのように順応性のあるものには徐々に成功の道は開けていくが、Hurstwoodのような過去の栄光にしがみつき、順応できないものには絶望的な homeless の生活が待ち構えている。大都市ニューヨークでは、Hurstwoodのような「小魚」(214) は巨大な「鯨」(214) に飲み込まれて、弱肉強食の社会に押しつぶされるだけである。

このように都市化した社会においては、大量生産をおこなう産業が導入され、Carrie が働く靴工場のように人間は大きな機械の一部として働くだけであり、労働さえも商品化されてしまう。工場は資本家が劣悪な条件のもとで労働者を搾取する「搾取工場」であり、よりよい労働条件を求める「新しい社会主義」(30) は、まだ労働界を支配するだけの力を持ってはいない。農村からの労働力を搾取して、工場は大量生産によって画一的な商品を次々に生み出していき、巷には表面だけが美しく映る衣裳や道具が溢れることになる。そうして、人々の意識は事

故郷の田舎町を後にしてシカゴに向かう列車の窓から、Carrieは「見慣れた村の緑なす風景」(1)をぼんやりと眺めているが、故郷が彼女の生活を経済的に支えてくれないと考えて旅立ったのであるから、すぐに彼女の想いは「都市」へと向かう。その都市を作者は作品の冒頭で次のように描く。

The city has its cunning wiles no less than the infinitely smaller and more human tempter. There are large forces which allure with all the soulfulness of expression possible in the most cultured human. The gleam of a thousand lights is often as effective as the persuasive light in a wooing and fascinating eye. Half the undoing of the unsophisticated and natural mind is accomplished by forces wholly superhuman. A blare of sound, a roar of life, a vast array of human hives, appeal to the astonished senses in equivocal terms. (1-2) [Italics mine]

「都市にはそれ自体がもつ姦計があり」、やさしい表情をして人間を誘惑する。無知な人間の墮落は都市のもつ「まったく超人的な力」によって起こる。「蜜蜂の巣箱のような」家々の並びや騒音や慌ただしい生活が、都市をみて驚いた顔つきの人々に訴えかけてくる。この描写では、*Manhattan Transfer*において Dos Passos が描いたのと同様に、「都市」は擬人化されていて、まさに生きている人間のように、やさしい表情をして誘惑的な言葉をかけてくる。その「姦計」に惑わされた人間は墮落への道を辿る。都市には魅惑と姦計の両方があり、無知な人間に対しては「超人的な力」を破壊的に発揮するのである。この都市に踏み込む Carrie は「半人前の騎士」(2)であり、「神秘の都市」(2)を偵察し、征服しようとする描写される。シカゴの姉の家に着いた彼女は「あらゆる方角に何マイルにも広がる広大な都市の騒音と動きとつぶやきに驚く。」(9)都市シカゴは次のように描かれる。

In 1889 Chicago had the peculiar qualifications of growth which made such adventuresome pilgrimages even on the part of young girls plausible. Its many and growing commercial opportunities gave it widespread fame, which made of it a giant magnet, drawing to itself, from all quarters, the hopeful and the hopeless—those who had their

強調しておきたいことは、作品の最後の Carrie の姿は、「物質主義の虚妄性」に開眼して、理想的な「夢の世界」を求めているのではないということである。やはり、「アメリカの夢」が伝統的にそうであるように、彼女の「アメリカの夢」も物質的なものと精神的なものが離れがたく絡み合っているということである。このような Dreiser の Carrie の「幸福」の描き方に表れているのは、彼自身の「アメリカの夢」に対する意識である。一方では、「アメリカの成功の夢」が人々を破滅的な方向へと導くと感じながらも、他方では、彼自身が惹かれていた「成功の夢」を完全には否定できなかったのである。

II. 発展途上の都市の魅力

Sister Carrie に描かれたシカゴやニューヨークという都市は、19世紀後半のアメリカの急激な都市化の動きのなかで捉えなければならない。アメリカが Jefferson 的農本主義から産業主義へと変化していく時に大都市は生まれ、アメリカの景観を緑溢れる田園地帯から幾何学的な建築物の建ち並ぶ都市へと物理的に変えていっただけでなく、アメリカ人の生活様式、思考様式をも内面的に大きく変えていった。ここでは、Dreiser の都市描写の特長と登場人物への都市の影響について考えていくことにする。この作品では、Dos Passos の *Manhattan Transfer* における Jimmy Herf のような都市生活の意味について深く考え込む人物は登場しない。Carrie も Drouet も Hurstwood も、Jimmy Herf のように大学教育を受けた知識人ではないので、都市という「怪物」に動かされるだけである。作者だけが都市生活の意味を考え、それを描写を通して表すのである。Dreiser は、やはり、自然主義的傾向の強い作家であるので、都市というものを人間の支配の及ばない圧倒的な力を有するものとして描いていく。都市の重圧のもとで矮小化され、無力感を強く感じる受動的な人間を描くという姿勢をとる。Dos Passos の Jimmy Herf のように都市生活の意味を考え、悩み、最後には都市を「悪」を生む場所として能動的に拒否するような人物は描かない。あくまでも都市という環境の犠牲者としての人間の姿を描くことに固執するのである。この二人の作家には人物の描き方にこのような違いはあるけれども、両者の都市に対する感じ方はよく似ており、都市の破壊的な力、人間を物質化するような影響力、都市における人間の疎外感、匿名性 (anonymity) を鋭く捉えていたという点において、後の作家たちが取り上げることになる現代的なテーマを扱った先駆けとなる作家であったといえることができる。

ちに対し、痛みを伴う悔悟を示す事がない」¹³⁾と評するが、Carrie 自身には、自分が都市で送った人生が完全に間違っていたという意識はないといわねばならない。それ故に、彼女に「痛みを伴う悔悟」がないのは当然のことである。確かに、彼女には「物質主義」が「人生の目標」の達成には不十分であることは Ames を通して幾分は理解されてはいるが、彼女が貧困のゆえに都市で辿った道はどうしようもなく必要なものであったし、金銭がある程度までは生きるために大きな意味を持っていることは彼女の都市における経験から痛い程に理解できていたのである。これは、Ames に愛情を感じ、彼の精神的なものに意味を置く理想主義を知り、生活するにはあり余るだけの給料を得た時の彼女の次の反応を見ればよく解るだろう。

It does not take money long to make plain *its* [money's] *impotence*, providing the desires are in the realm of affection. *With her one hundred and fifty in hand, Carrie could think of nothing particularly to do.* In itself, as a tangible, apparent thing which she could touch and look upon, it was a diverting thing for a few days, but this soon passed. Her hotel bill did not require its use. Her clothes had for some time been wholly satisfactory. Another day or two and she would receive another hundred and fifty. *It began to appear as if this were not so startlingly necessary to maintain her present state. If she wanted to do anything better or move higher she must have more—a great deal more.* (335) [Italics mine]

ここでは、Ames の影響で「お金の無力」を知り、「150ドルを手にしてもキャリーは特に何もすることを思いつかなかった」のだが、それでは彼女は「物質主義の虚妄性」を強く認識したのかということそうではない。「もしも彼女がより良い生活をし、より高級な所へ引っ越そうとすれば、彼女はより多くのお金、遙かに多くのお金をもたねばならない」のである。その上、彼女は、ある演劇作家からの「無料奉仕」(335)の慈善演劇への出演をも断って、最後まで金銭への執着を示している。それ故に、彼女にとっての「幸福」とは、ある程度の経済的に豊かな生活を保証されたうえで、精神的なものを考える生活を送ることであるといわねばならない。物質的な豊かさを無視して、精神的な豊かさだけを彼女が求めたとしたら、却って作品のリアリティは無くなってしまいうだろう。筆者がここで

この「称賛すべき道」(the admired way)を選ばず「間道」(the despised path)を選んだとしても誰も非難できないと書く。彼女はこの「間道」を選んで豊かな生活と、その先にある「美」を求めた。しかし、「勤勉」を経ていない以上は、世間にはこれは「過てる道」と見られるほかないと作者は説明する。彼女は「都市」が提供すると思える贅沢と美に憧れ、固執した。彼女が出会った都市の人物 Drouet や Hurstwood がこれを代表すると考えたが、実は、彼らには本当に「より高い美」を表すことは出来なかったし、彼らの世界には本当の「幸福 (happiness)」(369) はなかった。彼女は、今ではもはや美しい服装などに惑わされることはない。人々がきらびやかな外貌の先に、輝くばかりの「平和と美」(369)を持っていたら羨望の対象となったであろう。一人孤独に揺り椅子に揺られて窓の外の都市を眺めている彼女は、考えるよりも感じるころの多い人が、「美を追求して道を過ったひとつの例証であった」(369)と作者は付け加える。もちろん、作者のこの言葉は、Carrie の不倫や、金銭欲を道徳的に強く否定しているとは感じられない。Richard Lehan は、この作品の原稿と出版されたテキストを比較して、Carrie は「原稿におけるよりはより娘らしく、処女らしく (virginal)」¹¹⁾描かれていると論じている。これは前にも述べた出版時の Doubleday 夫人の憤りと関係している。そこで、Carrie の描写の仕方にも virginal な所と「vamp 的な所」¹²⁾が混じり合っている。どちらかといえば彼女は「妖婦的」なところが強いと思われる。作者は何時も注意深く道徳的に良心の呵責を書き入れて、「処女的」な雰囲気を出そうと試みてはいるが、全体的には、彼女の「妖婦的」な所はあらわである。だから、作者の道徳的な言葉も、作品全体から読者が受けるイメージとは合わない点が多いことに注意しておいたほうがよいだろう。作品の最後では、彼女は幻滅に遇いながらも、なお、夢の国に導かれる長閑な日の到来を待っている。Ames は「更に先の一步」(369)を示唆してくれたが、たとえそれに到達しても、つぎの一步が彼女を待ち受けていただろう。彼女の人生航路は遥かに遠くの丘の頂上を染める喜悅の光の追求であった。「豊満も満足」(369)もなく、彼女は椅子に腰掛けて「幸福」に憧れている。永久に「より高いもの」を求めて思いに耽る Carrie の姿を示して作品は終わる。ここで、Carrie が物質的な成功を収めながらも「豊満も満足」もないのは、Ames の示唆した精神主義の達成が都市において如何に難しいかに気づいているからである。

このような Carrie の生き方を、村山淳彦は「キャリーは、成功の夢に含意されていた物質主義の虚妄性に気づいたものの、それまでおかしてきた自分の過

部分」(354)を持っているように思えたからである。一方の Ames には、Carrie の演劇での成功と人気などは何の意味もない。レビューのような喜劇ではなく、もっとシリアスなもの(純正演劇)をやるように勧め、それだけの繊細な感受性が彼女にはあるという。彼は、彼女には「世界が表現しようと苦闘している」(356)ものを表す才能があると述べ、その才能は誰にでも生れつき与えられているものではないので、彼女がその才能を発揮しなければ彼女は「自然(Nature)」(356)に対して裏切りをしていることになるという。こうして彼女は「より高い理想」への思いを新たにすることになる。しかし、現実には彼女はその理想に対して何もしないで終わり、ただ、理想に対する苦悩と憧憬だけが残る。Ames のかきたてた理想は、結局は、Carrie のなかで消化不良に終わっているといわざるをえない。このことを、作者 Dreiser の作品構成上の欠点ときめつけるのにはまた問題がある。彼女は、Ames の理想への共感と同時に、まだ物質中心主義に捕われた部分が大きく残っているのであるから、「より高い理想」を達成してしまう彼女の姿を描いたならば、却って作品の現実感を損なうことになると思われるからである。

作品の最後の47章は解釈上非常に重要である。Carrie は彼女の「人生の目的」(367)を達成している。馬車、高級な家具、銀行預金通帳を手に入れ、友人も持っている。しかし、Ames の影響を受けた今ではそれでも「孤独」(368)であり、「名声」などは「取るに足りない、退屈な」ものであると感じる。作者は彼女の歩んできた道を弁護して次のように書いている。

Convention to say : “*You shall not better your situation save by honest labour.*” If honest labour be unrenumerative and difficult to endure ; if it be the long, long road which never reaches beauty, but wearies the feet and the heart ; if the drag to follow beauty be such that one abandons *the admired way*, taking rather *the despised path*, leading to her dreams quickly, who shall cast the first stone ? Not evil, but longing for that which is better, more often directs the steps of the erring. *Not evil, but goodness more often allures the feeling mind unused to reason.* (368) [Italics mine]

「勤勉」(honest labour) によらなければ自己の状況を良くすることは出来ないと世間ではいうけれども、勤勉が報いられるところの少ない労苦であるならば、

福」の概念に付きまといっていたのである。この考え方に全く新しい光を当てた人物が西部インディアナ生まれの電気技師 Robert Ames で、彼とはニューヨークで Hurstwood と生活するようになって、仲のよい金持ちの隣人 Vance 夫人を通して知り合いになる。高級なレストランで三人で食事をした時に、Carrie は Ames の考え方を知り感銘を受ける。

The red glow on his head gave it a sandy tinge and put a bright glint in his eye. Carrie noticed all these things as he leaned toward her and felt exceedingly young. *This man was far ahead of her. He seemed wiser than Hurstwood, saner and brighter than Drouet.* He seemed innocent and clean, and she thought that he was exceedingly pleasant. She noticed, also, that his interest in her was a far-off one. *She was not in his life, nor any of the things that touched his life, and yet now, as he spoke of these things, they appealed to her.*

“I shouldn’t care to be rich,” he told her, as the dinner proceeded and the supply of food warmed up his sympathies ; “not rich enough to spend my money this way,”

“Oh, wouldn’t you ?” said Carrie, the, to her, new attitude forcing itself distinctly upon her for the first time.

“No,” he said. “What good would it do ? A man doesn’t need this sort of thing to be happy.” (237) [Italics mine]

彼は彼女よりも「遙かに優れた人物」であり、これまで彼女が知ったどの人物よりも教育がある。彼にとっては上流階級の生活様式などは無意味なものであり、「金銭」や贅沢というものは「幸福になるために」必要なものではないと Carrie に説得する。これは Carrie のこれまでの考え方を完全に否定するものである。しかし、彼は彼女の「芝居」に対する関心には強く共鳴する。この Ames の「理想主義」は彼女に大きな影響を及ぼし、彼女は揺椅子に揺られながら「何かを見始める」(238) ことになる。

そして、Carrie は演劇女優として徐々に成功を収め、ついには週給150ドルという大金を稼ぐことになる。この時再び Ames と会うことになる。彼は、今度は、ニューヨークに出てきて電気関係の実験所を開いている。この時、彼女には彼に対して興味が湧かない。自分の演劇での成功によって、彼が「是認したものの大

well-positioned man from view. In Chicago the two roads to distinction were politics and trade. In New York the roads were any one of a half-hundred, and each had been diligently pursued by hundreds, so that celebrities were numerous. *The sea was already full of whales. A common fish must needs disappear wholly from view—remain unseen. In other words, Hurstwood was nothing.* (214) [Italics mine]

シカゴでは成功に至る道は政治と商業であるが、ニューヨークではその道は50もある。大都市は成功の機会は数多くあるが、そこはまた弱肉強食のジャングルでもあり、失敗者は全く無視されてスラム居住者にまで堕ちていく。そこはまた、「化学の試薬」(214)がそうするように人々の考え方を大きく変化させてしまう場所でもある。ここでは作者は、Herbert Spencerの“Social Darwinism”を使い、社会形態としての「自然淘汰」の理論を認めている。これは更に推し進められると「適者生存」という考え方になり、アメリカの財閥カーネギーやロックフェラーはこの哲学を大いに利用したのであった。この「適者生存」には、Carrieのような順応力が必要で、それを欠くHurstwoodは急速に「下降」していかざるをえない。CarrieがHurstwoodと対照的に「上昇」していく理由として彼女の「冷酷さ」を挙げる批評家もいる。Kenneth S. Lynnは「キャリーは全ての人物の中で最も冷酷である」¹⁰⁾と評するが、作者はその「冷酷さ」を際立たせないようにいつも注意深く描いているという事も忘れてはいけない。DrouetやHurstwoodを彼女が捨てる時にはいつも、それほど強調されている訳ではないが、「良心の呵責」があることを描き込んでいるのである。

このようにこの二人の浮沈には「都市生活」への順応性というものが大きく作用している。CarrieはHurstwoodの収入が減り、貯えも底を突くようになると、舞台女優としての職を得て、最後には週給150ドルを得るようになり、Hurstwoodを捨ててしまう。豪華なホテルで生活するようになった彼女は表面上は「成功」し、「幸福」を手に入れたように見えるが、決して内面的には本当の「幸福」は感じられずに、これまで通りいつまでも「遠くの世界の丘の頂を染める喜悅の輝き」(369)を求めて夢を見ていくことになる。そこで、これからはCarrieの「幸福」とは何であったのか、そして、彼女が長い間憧れてきた「よりよい生活」を手に入れたのに「幸福」を感じられないのは何故なのかを考えていきたい。彼女の「幸福」は、長い間、少女時代の貧しい境遇から逃れてお金が可能にしてくれる「享樂の世界」を手にするのであった。そういう物質的なものだけが「幸

(rise) が際立ってくる。Charles C. Walcutt は、「この点から Hurstwood の下降と Carrie の上昇が交唱聖歌のような関係 (antiphonal relationship) で描きだされる」⁸⁾と論じている。そこで、この二人の「下降」と「上昇」はどういう意味を持っているかをこれから考えていきたい。カナダのモントリオールで二人は結婚式を挙げる。もちろん、Hurstwood はまだ妻とは離婚していないのだから盗みと重婚の二つの罪を背負うことになる。ともかく、二人は Wheeler という名前を名乗る。Carrie はこの作品のなかで次々に名前を変えていくことになる。Carrie Meeber から Carrie Wheeler へ、そして、ニューヨークに出からは Carrie Murdock、そして、Hurstwood を捨てて演劇界に出たときには Carrie Madenda を名乗る。これは彼女に個人としての「アイデンティティ」が欠如することを示すと同時に、周囲の社会に対する彼女の「順応力」の強さをも示している。この「順応力」は、また、彼女の「都市」における「上昇」、つまり、「成功」を可能にする重要な特質でもある。ここで、興味深いことは、Carrie の名前の変更が John Dos Passos (1896-1970) の都市小説 *Manhattan Transfer* (1925) に登場する Ellen Thatcher のそれとよく似ていることである。彼女は Ellen Thatcher から Ellen Oglethorpe へ、そして、Helena Herf に名前を変えて、「成功」への梯子を昇っていく。過去に固執せずに、時には冷酷ささえ示して新しい環境に「順応」していくことが「都市」における「上昇」には必要である点では Dos Passos と Dreiser は類似しているといえる⁹⁾。一方の Hurstwood は Carrie とは対照的に名前の変更に伴う意識の変革ができない。ニューヨークに出て仕事に失敗し、徐々に落ちぶれていくのだが、酒場の支配人としての過去の栄光の思い出に耽るばかりで、新しい自己の境遇に順応していくことができない。シカゴという「都市」では成功を収めた彼も、それより遙かに大きい「大都市」ニューヨークという「海」(ocean) では「鯨」(whale) に飲み込まれる「小魚」(common fish) にすぎない。

Whatever a man like Hurstwood could be in Chicago, it is very evident that he would be *but an inconspicuous drop in an ocean like New York*. In Chicago, whose population still ranged about 500,000, millionaires were not numerous. The rich had not become so conspicuously rich as to drown all moderate incomes in obscurity. The attention of the inhabitants was not so distracted by local celebrities in the dramatic, artistic, social, and religious fields as to shut the

境の犠牲者として人間一般を規定している。人間の文化はまだ中間的段階にあり、動物のように「本能」(instinct) だけで導かれることもないが、人間らしく「理性」(reason) だけで導かれる段階に入ってもいない。つまり、人間はまだ完全な発達段階に入っていないので、「自由意志」(free-will) によって「本能」を自由に操ることも出来ない。「自由意志」と「本能」が十分に調節される時がくれば、完全な「悟性」(understanding) が「本能」にとって代わり、人間も変化することなく、「悟性」がしっかりと「真理」をめざすようになる。これが作者の人間の歴史への展望である。Carrie の immorality は人間の進化の過程が不十分なために生じたものとして弁護しているのである。

「よりよい生活」を憧憬する彼女は、Drouet の友人であり、また、より高い社会的地位に就いている George Hurstwood という酒場の支配人に愛されることになり、Carrie 自身も彼に惹かれるようになる。彼女は、洒落た身なりのこの支配人 Hurstwood を Drouet より「優れた男」(82) とすぐに考える。二人の愛人の間で心が揺れる彼女は、良心の呵責を感じながらも、Hurstwood の高い身分と品のよさに惹かれて、Drouet から徐々に離れていく。ここで Hurstwood の家庭環境について見てみると、彼の家庭は「豊かな上流階級」ではないが、一応上流階級に属している。しかし、彼は勤勉と人当りのよさで支配人にまで出世した男で、もともと下層階級の出である。夫人は上流階級の付き合いを大事にし、子供達の成長にばかり気を配っているために、彼は家庭内では孤独であり、その捌け口が Carrie に対する愛情となったのである。彼の Carrie に対する愛情は「何年間も乾燥した不毛な土壌のなかで萎えかけていた感情の開花」(90) と描かれる。Carrie には夫人にない自然のままの素朴な美しさがあった。Hurstwood の家庭には、言わば、現代社会の核家族の特徴があり、家族の意思の疎通も欠如しており、倦怠と孤独に満ちている。そういう家族に Carrie との関係がばれるに及んで、Hurstwood は酒場の金庫から10,000ドルを盗み、彼女を伴ってカナダへ逃亡する。この金庫からの盗みには、後の *An American Tragedy* において Clyde Griffiths が Roberta Alden を溺死させる場面と同じく、本当に盗みあるいは溺死させる意図があったのかどうかを曖昧にし、「偶然」が人間の一生を決定する力を重視するという Dreiser らしい物語の展開がなされている。

(2) ニューヨーク

これ以後は、よく言われるように Hurstwood の下降 (fall) と Carrie の上昇

教養のない生い立ちからして納得がいく。シカゴの姉夫婦の家に着くと、貧しい下層階級の労働者である Mr. Hanson の地味で生気のない態度に幻滅を感じる。仕事を捜してみても、学歴も仕事の経験もない彼女には、やっと大量生産の靴工場の手仕事しか見つからない。搾取工場 (sweatshop) の「歯車」として、いつ果てるともない苦しい仕事をするに及んで、彼女は労働者の悲哀を強く感じる。そして、Drouet の世話になり、彼の囲い者としての生活を送るようになる。もちろん、彼女はそういう囲い者としての生活には良心の呵責を感じるために、彼に結婚を迫る。Drouet は女たらしの「めかし屋 (masher)」(3) ではあるが決して「邪悪なところはない」(48)。結婚を約束させて、同棲する生活のなかで、彼女はお金が可能にしてくれる華やかな生活にますます強く惹かれることになる。Drouet との不倫の関係について、先にも触れた Dreiser 特有の「哲学談義」(philosophizing) が展開される。

Among the forces which sweep and play throughout the universe, untutored is *but a wisp in the wind*. Our civilisation is still in a middle stage, scarcely beast, in that *it is no longer wholly guided by instinct ; scarcely human, in that it is not yet wholly guided by reason*. On the tiger no responsibility rests. We see him aligned by nature with the forces of life—he is born into their keeping and without thought he is protected. *We see man far removed from the lairs of the jungles, his innate instincts dulled by too near an approach to free-will, his free-will not sufficiently developed to replace his instincts and afford him perfect guidance. . . .*We have the consolation of knowing that evolution is ever in action, that the ideal is a light that cannot fail. He will not forever balance thus between good and evil. *When this jangle of free-will and instinct shall have been adjusted, when perfect understanding has given the former the power to replace the latter entirely, man will no longer vary. The needle of understanding will yet point steadfast and unwavering to the distant pole of truth.* (56-57) [Italics mine]

この文章は、Carrie の不倫 (immorality) を弁護しようとするものであり、まず、自然主義作家らしく「無知な人間は風の中の紙片にすぎない」と述べて、環

「世界は自己表現をしようと苦闘している」が「大抵の人間は自分の感情を表現することができません。」それゆえに、それを表現する「天才が必要になってきます」と述べて、Carrie がその適切な例であるといっている。Ames のこの言葉には Carrie に対するお世辞が多少はあるかもしれないが、彼はいつも非常に控えめな言葉を発する人物であるので、やはり Carrie はそれなりの才能を持った人物であって、無能者とは云い難い。彼女が「無知」であるのは世間の諸事に対して、特に故郷とは全く異なる都市生活の全般に対してであるといったほうがよい。そういう Carrie には「快樂欲求」(24) が非常に強く、これは性的な快樂欲求というだけではなく、世の中の「よりよいもの」への憧れの強さを示している。快適な暮らし、美しい衣装、娯樂の楽しみ、そしてこれらを可能にするたくさんの「お金」に強く憧れているのである。

彼女がシカゴゆきの列車で偶然出会い、のちにはその愛人となる Charles Drouet は、当時、多かった「旅回りのセールスマン (drummer)」(3) であり、田舎者の彼女には豊かな生活を象徴する人物と映る。彼の身ごなし、洒落た服装、艶のある靴などが彼女の目を最初に捉え、その内面の人間性は後方に押しやられてしまう。

His suit was of a striped and crossed pattern of brown wool, new at that time, but since become familiar as a business suit. The low crotch of the vest revealed a stiff shirt bosom of white and pink stripes. From his coat sleeves protruded a pair of linen cuffs of the same pattern, fastened with large, gold plate buttons, set with the common yellow agates known as “cat’s-eyes.” His fingers bore several rings—one, the ever-enduring heavy seal—and from his vest dangled a neat gold watch chain, from which was suspended the secret insignia of the Order of Elks. The whole suit was rather tight-fitting, and was finished off with heavy-soled tan shoes, highly polished, and the grey fedora hat. He was, for the order of intellect represented, attractive, and whatever he had to recommend him, you may be sure was not lost upon Carrie, in this, her first glance. (3)

都市的な華やかさに憧れる Carrie には人間の外貌、衣装が最初に注意を惹くものであり、衣装をそれを身につけた人物の本質と見てしまうのは彼女の貧しく

When Caroline Meeber boarded the afternoon train for Chicago, her total outfit consisted of a small trunk, a cheap imitation alligator-skin satchel, a small lunch in a paper box, and a yellow leather snap purse, containing her ticket, a scrap of paper with her sister's address in Van Buren Street, and four dollars in money. It was in August, 1889.⁶⁾

1889年8月、シカゴの姉を頼りに小さなトランクとハンドバックと弁当と現金4ドルを携えて、父親が「日雇い労働者」(1)として働くこの田舎の町をあとにするのだが、このような若い娘たちの旅立ちの姿は当時の田舎ではごくありふれたものであった。貧しくて仕事もない田舎を捨てて、機会の都市シカゴへ「成功の夢」をかけて旅立たざるをえないような経済的状況にあったのである。Carrieは「聡明で、臆病で、そして無知と青春の幻想に満ちていた」(1)と説明される。彼女は貧乏で、田舎育ちであるために世間の諸事に不慣れではあるが、「どんな言葉による知能試験を受けても、おそらく標準をかなり下回るだろう」⁷⁾と Ellen Mores がいうほどに愚かではない。あらゆる事柄に「受動的」(passive)な反応しか示さないけれども、異なる新しい環境の中に入っても徐々に「順応力」を示し、彼女にとって適切な判断を「直観(intuition)」(9)的に下している。作者は Carrie のことを「推論するよりもむしろ、感じるところの多かった人」(369)と表現しているが、彼女の「直観的な」感じ方には、一見したところ目立ちはないが、「狡猾さ」さえ認めることができるのである。Dreiser 自身が作品の後半において、「彼女は小心ではあったが才能(capability)には恵まれていた」と書いてもいる。もしも彼女が本当に無能者であるならば、のちに Carrie の精神的支柱となる Ames (Robert Ames) の次の言葉はどう解釈したらよいだろうか。

“The world is always struggling to express itself,” he [Ames] went on. “Most people are not capable of voicing their feelings. They depend upon others. That is what genius is for. One man expresses their desires for them in music ; another one in poetry ; another one in a play. Sometimes nature does it in a face—it makes the face representative of all desires. That’s what has happened in your case.” (356)

feature-writer fell away, as did also the cumbersome, only half-accurate abstract terms (“affectional,” “actualities”). Then he could write long passages where nothing is striking except the total effect.⁴⁾

「文体のぎこちなさ」が強調されるあまり、Dreiser 特有の「旅回りの絵師」のような熟練された「平明な文体」が数多くあることが見過ごされていると Matthiessen は注意を促している。たしかに、人物の心情や情景の描写に非常に美しい、叙情性豊かな箇所がたくさん存在する。しかし、プロットの展開の途中に突然差し挟まれる作者の「哲学談義」にはぎこちなさが感じられることは間違いのない。作者が登場人物に対して判断を差し控えるのが現代小説の特長であるとするれば、Dreiser は、やはり、世紀の転換期の作家らしい古めかしさも持っていたといわねばならない。そういう時代的な制約を考慮に入れば、多くの批評家のように文体の批判ばかりする訳にはいかない。ただ、村山淳彦が指摘するような文体の揺れがたえず認められることは間違いなく⁵⁾、これは、Dreiser 自身に人物に対する共感と批判が混じり合っていたからにほかならない。作者自身が「成功の夢」の神話に肯定と否定の混じった感情を抱いていたから Carrie に対する姿勢が揺れ動いているのである。文体にはこのように問題はあるが、Dreiser のアメリカ文学における意義は、極めて現代的な問題を時代の道德観を越えて描きだしたことにある。彼がこの作品で着目した諸問題、急速な都市化、それに伴う疎外感や人間の非個性化や孤独感、商品と化した労働力、華やかな都市における成功への憧れと幻滅などは、後の20世紀の作家たちが執拗に描きだそうとした問題でもあった。それらをいち早く取り上げて作品化しようとした彼には時代への鋭い眼があったのであり、その結果が一般読者や批評家からの激しい非難であったとしても、これまた、その時代の読者と批評家の限界というよりほがなく、彼の存在は現代の作家や読者の私たちににとって非常に意味が大きいといえる。

I. キャリーの「幸福」への道

(1) シカゴ

この作品は18才の Carrie (Caroline Meeber) が故郷中西部のウィスコンシン州コロンビア・シティ (Columbia City) から列車でシカゴへ旅立つ場面で始まる。その出で立ち次は次のように描かれている。

ている。枯れ死したと思われた農民たちの畑の麦が、再び一斉に芽をふくという「自然の生命力の強さ」を作品の最後で提示し、将来への希望を残しているのである。悲観的な「自然主義的」人間観と共に、人間性の信頼、生の尊厳を主張する「ロマン主義的」人間観が併置されているのである。このような特長は自然主義のアメリカ独特の展開を示すものとして重要であろう。

こうして最後に Dreiser がアメリカ自然主義を完成するのであるが、特に彼の初期の作品は自然主義の傾向が強く表れている。*Sister Carrie* では、資本家の労働搾取と搾取された人々のどうしようもないもがき、環境が人間の運命を決定してしまうという「決定論」などがあらわである。次の作品 *Jennie Gerhardt* (1911) では、薄幸ではあるが、生きる生命力を備えた主人公 Jennie ではなく、彼女の愛人であり、財閥の息子である Lester Kane を通して、巨大な経済機構と彼の父親に代表される因習的な力にどうしようもなく動かされて、「自由意志」を持った行動をとることができなくなる様子を描き、やはり「決定論」的思想を表している。また、*An American Tragedy* (1925) においては、アメリカ的な「成功の夢」に突き動かされて立身出世を夢見た主人公 Clyde Griffiths が、理性も合理的判断も欠如しているために、自己の金銭的欲望と性の力と偶然のもたらす運命に翻弄され、さらには、社会経済機構の前に破滅していく様子を描きだしたのである。これらの Dreiser の作品には女性の大地母神的な生命力の強さや宗教的な救いの問題なども提示されてはいるが、やはり、これも能動的な提示ではなくて、受動的なものであるといわざるをえない。このようなアメリカの自然主義文学の流れのなかで Dreiser の *Sister Carrie* は生まれてきたことを、まずは押さえておきたい。

では、ここで *Sister Carrie* の問題に戻ることにする。Dreiser についてよく云われることは、その文体のぎこちなさと、「哲学談義」(philosophizing) の難解さである。批評家 Lionel Trilling は、Dreiser の文体の醜さはその思考の低俗さを示すものであると厳しく非難攻撃している³⁾。虚飾に凝った文体と「銜学趣味」(bookishness) は多くの批評家の不評を買ったのではあるが、これに対して F. O. Matthiessen は Dreiser 弁護にまわって次のように評している。

Charges of clumsiness have been repeated against him [Dreiser] so often that they have obscured the many passages where, like the journeyman painter, he has a mastery of the plain style. When his mind was most absorbed with what he had to say, the flourishes of the

という社会現象が大きく関わっているということを強調しておきたい。この時代のアメリカは農業中心の社会から工業中心の都市社会へと大きく変化していった。その結果、貧富の差が特に際立つことになり、都市の生活の底辺には貧しく苦しむ人々が蠢く事になったのである。そういう人々は成功をもとめてもなかなか得られず、厳しい環境に翻弄され、弱肉強食の社会から見捨てられていった。こういう人々が自然主義文学の描く対象になっていることが非常に多いことは注意しておく必要があると思われる。ではここで、アメリカ文学の場合には、自然主義がどういう形で表れているかを簡単に見ておきたい。

アメリカの自然主義文学は、William Dean Howells (1837-1920) の写実主義 (Realism) から派生的に生まれた。Howells がアメリカ人の生活の比較的明るい面を写實的に描くことを目指したのに対して、より新しい作家たちは人生の醜い暗黒の部分を描きださねば本当の人間の生きる姿はとらえられないと考えた。Howells の写実主義はヴィクトリア朝的な「お上品な伝統」 (Genteel Tradition) から抜け出してはいないオプティミスティックな写実主義であり、これから完全に離脱することが自然主義作家たちの目標であった。そして、その先駆者の役割を果たしたのが Stephen Crane (1871-1900) であり、処女作 *Maggie: A Girl of the Streets* (1893) において、ニューヨークの貧民居住地区バワリー街に生まれた Maggie が貧しい家庭環境から抜け出すことができず、幸せをかけた恋人にも捨てられ、生きていくために売春婦にまで堕ちていく姿を描いた。環境 (都市) の個人に及ぼす影響を印象主義的な色鮮やかなイメージを使って浮かび上がらせたのであった。次に、Frank Norris (1870-1902) はアメリカ文学の伝統のなかにフランスの自然主義を導入した作家として知られている。代表作 *McTeague* (1899) は Zola の影響を受けた作品であり、作品の個々の事実について綿密な実地調査を行なっている。鉱山 Big Dipper Mine やサンフランシスコの Polk Street の調査や主人公 McTeague の歯科医としての行動を描くための歯科医療専門書の読破などは自然主義作家の特長を強く示している。更に、主人公の運命を決定するものとしてその遺伝的特質を重視している。また、次の作品 *The Octopus* (1901) では、San Joaquin Valley での、搾取的鉄道会社と農民の対立を小説化した。強大な資本主義の力の下で敗北する農民の姿を通して、Presley という詩人の思想のなかで、人間を「極微動物」 (animalcule), 「かげろう」 (ephemerid) と捉え、極度に弱小化し、環境に決定されてしまう人間の姿を示している。これは自然主義の「決定論」によるものである。しかし、この作品では、自然主義とは対立的なロマンチズムも強く表れ

には、Carrieが何らの罪の意識も感じていないと申し立てたために出版中止になる場所であった¹⁾。先の Norris の助力でなんとか出版にはこぎつけたが、宣伝も広告も一切なかったために売れ行きが良いはずはなかった。また、書評も芳しくなく、アメリカの恥をさらす作品であるというのが大方であった。このような出版の事情を経て世にでたこの作品は、アメリカで初めて本格的に「都市と人間」の関係を扱った優れた自然主義小説となり、現在にいたるまで高く評価されている。ブランチ・ゲルファントの言葉を借りれば、「ドライサーは作品のなかで、都市生活の意味について考察するほど思索的な人物や、聡明な人物を創り出すことはしていないが、都市生活を強烈に体験していく人物を描いてくれた」²⁾のである。「都市と人間」の関係については後に詳しく触れることにして、ここでは、まず、Dreiser がその完成者といわれている「自然主義理論」について考えておきたい。

「自然主義文学」とは19世紀の自然科学、社会科学の方法を文学作品に適用したものであり、フランスの Flaubert, Daudet, Maupassant を経て Emile Zola (1840-1902) によって確立された。Zola はその著書『実験小説論』(1880) において自然主義小説理論を展開した。この理論は、1890年代にはヨーロッパからアメリカに入り、発展させられ、アメリカ独自の長を備えたものとなっていった。この理論については批評家によってさまざまな定義がなされているが、ここでは一般的に認められているこの理論の要素をまとめておきたい。まず第一に、自然科学理論を援用するのであるから、対象の観察の仕方が科学的であること、つまり、主観的ではなく客観的に対象を描写することが挙げられる。そして、生物学における人間の遺伝や本能的衝動を重視して、その力に対して無力な人々を描く。また、社会科学における環境の問題を重視して、政治経済の力や因習の支配する環境には、人間は翻弄されるだけであり、最終的にはその犠牲にならざるをえないという「決定論」(determinism) がある。このような悲観的な「決定論」があるために、人間は自発的に進むべき道を切り開いていくことができない、つまり、人間には「自由意志」(free will) がないと考える。人間は世界のなかで弱い存在でしかないのです、そういう人間を「道徳的に」判断して非難することはできないとする。その結果、自然主義文学は知性が低く、凶暴性を内に秘めたような者、あるいは下層階級の貧民を主人公として選ぶことが多い。またその描き方は非常に客観的なものであるから、実際に起きた事件を精査して作品にしていけることが多い。以上が一般的に認められている自然主義文学理論の内容であるが、筆者は、ここで、自然主義文学の誕生には、この時代の「都市化」

Theodore Dreiser : *Sister Carrie* (1900)

——都市の誘惑——

馬 場 弘 利

序

アメリカ自然主義小説の完成者といわれる Theodore Dreiser (1871-1945) は Indiana 州 Terre Haute で、ドイツ系移民二世の子として生を受けた。少年時代の彼は、貧困を極める家庭のなかで育ち、その家庭環境が彼の後の作品における考え方や素材の選択に大きな影響を及ぼしたことは間違いない。彼の兄弟姉妹は、ほとんどがいわゆる非行少年少女であり、絶えずソーシアル・ワーカーの世話になって少年少女期を過ごした。なかでも、長姉 Mame は派手に着飾って町を徘徊し、ある弁護士に誘惑されて私生児を生んでおり、また、次姉 Emma は少女時代から名うての官能的な悪女で、成人してからはシカゴで酒場の支配人と駆け落ちすることになる。こういう姉たちの行動が、ここで扱う小説 *Sister Carrie* (1900) の素材になっている。Dreiser 家の子供達はすべて貧しい家庭環境の犠牲者であったのである。Theodore Dreiser は高校卒業後はシカゴに出て、Carrie と同じように職探しをしている。そして、ある高校の教師の援助で、1 年間 Bloomington の Indiana 大学に在籍しており、この時の知的な刺激が、彼の作家としての後の生活に大きく寄与している。大学を途中でやめた後、彼は、*Sister Carrie* の出版までいろいろな新聞社の記者として経験を積み、社会の底辺に生きる人々のさまざまな生活を見聞する。

この作品の出版に関する事情はよく知られているところだが、最初に原稿を読んだ Harper 社は、内容が不道德という理由で出版は不可能と判断した。しかし、当時の自然主義文学の先駆者である Frank Norris (1870-1902) が Doubleday, Page 社にこの作品を推薦してくれたことで出版契約を結ぶことができた。ところが、社会奉仕家・道德改良家であった Doubleday 夫人がこの原稿を読んで、内容が不道德であり、作者がその不道德に共鳴していると感じて、さら